

引きこもりがちな脳卒中障害者と家族が「初めの第一歩」を踏み出すためのイベント開催

後藤 みなみ ●特定非営利活動法人ドリーム 事務局員



「教室無料体験」絵手紙教室の様子

要旨

脳卒中障害者は、ある日突然脳卒中によって後遺症を負い、それによって仕事を失った人や友人と疎遠になった人など、生きがいを失い、引きこもりになってしまう人がいる。そのような当事者と家族に外出のきっかけを作り、他者交流の機会増加に繋げることを目的に「脳卒中サービスデー」というイベントを開催した。実施内容は、脳卒中障害者が店員を務める喫茶店を利用した“当事者・家族であることが特典となるようなサービス提供”“当事者が講師を務める教室への体験会”“当事者・家族と話ができる相談会”である。

当事者にとって、イベントを経験して得た少しの自信が、今後の外出機会を増やすための非常に重要なターニングポイントになったのではないかと考えられる。

脳卒中障害者の社会参加を目指すためには、地域社会全体で当事者と家族を支えていく体制が必要である。今後も各種機関と連携を図りながら、支援活動や啓発活動を推し進めていきたい。

1. 背景と目的

脳卒中障害者は、ある日突然脳卒中によって後遺症を負ってしまう。それにより仕事を失った人や友人と疎遠になった人など、社会から必要とされていないと感じ、生きがいを失い、引きこもりがちになってしまう人がいる。さらに、脳卒中障害者のうち、69.3%が病前より他人との交流が減少し、73.1%が後遺症を受け入れがたいと思っているというデータも出ている(脳卒中後遺症患者の生活実態調査、2018)。本事業は、そのような引きこもりがちな脳卒中障害者と家族に外出のきっかけを作り、他者交流の機会増加に繋げるための「初めの第一歩」を踏み出してもらうことが目的である。

また、引きこもりがちな当事者は、外部の情報を得る機会が少ないという課題があり、情報を届けるには、直接関わることができる専門家や支援者からの情報提供が必要である。各種機関へチラシ配布の協力を要請し、当事者と家族へ情報を届けることも目的に実施した。

2. 活動の方法

脳卒中を発症したことがある人に3つの特典がある「脳卒中サービスデー」というイベントを開催。

【脳卒中サービスデーの概要】

<日時>

第一回 2020年 9月12日(土) 10時~17時

第二回 2020年11月14日(土) 10時~17時

第三回 2021年 3月13日(土) 10時~17時

<場所>

小規模作業所ドリーム伏見(当団体が運営す

る小規模作業所。作業所内は脳卒中障害者が店員を務める喫茶店になっている)

<特典内容>

特典① 脳卒中障害者とお連れ様はドリンクとプチケーキをプレゼント

(当喫茶店のドリンクとプチケーキを無料で提供。当事者・家族であることで特典を受けられるサービス)

特典② 脳卒中障害者の先生が教える! 教室無料体験

(パソコン言語・パソコンアート・絵手紙教室の無料体験会。当事者が講師を務めており、同じ障害のある人の気持ちや特徴を最大限に理解した教室)

特典③ お悩み相談会

(当事者や家族と直接話ができる個別相談会)

【広告方法】

愛知県内の約450カ所へチラシ郵送

(社会福祉協議会・障害者基幹相談支援センター・回復期病院・通所リハビリテーション・訪問看護ステーション・居宅介護支援事業所など)

3. 現状の成果・考察

参加者数(脳卒中障害者とお連れ様)は延べ85名であり、悩みを相談される人や交流の場を求めて教室へ参加される人、気楽に喫茶店を利用される人など様々であった。

教室無料体験は、互いに病気の体験を話すなど、非常に和やかな雰囲気で行われ「普段人と話す機会が少ないので、色々な話ができ嬉しかった」という感想が多く、他者交流のきっかけとなっていた。イベント後も、継続して教室へ参加されるようになった人もいた。

お悩み相談会は「話ができ気持ちが少し楽になった」「他の人の話が聞いてよかった」という感想ばかりで、同じ病気を体験した者同士だからこそ分かり合える思いを共有でき



喫茶店内の様子

「脳卒中サービスデー」のチラシ

る場となった。

イベントを通して、当事者にとって「地下鉄に乗って喫茶店へ行けた」「悩んでいるのは自分だけではないと知った」「片麻痺があっても絵手紙を楽しめた」といった経験が、今後の外出機会を増やすための非常に重要なターニングポイントになったのではないかと考えられる。

参加者数は、新型コロナウイルス感染症による自粛生活の影響もあってか、当初の予想数よりも少ない人数となってしまった。コロナ禍以前に比べて外出や他者交流の機会が減ったという声も多くあり、外出のきっかけづくりや直接会って話せる機会の必要性をあらためて感じた。

広告宣伝は、通常月の約2倍の機関へイベントチラシと団体パンフレットを発送することができた。それによって、普段は情報を送ることができないところへも発送ができ、新たな繋がりができた。

4. 今後の展望

脳卒中障害者の社会参加を目指すためには、地域社会全体で脳卒中障害者を支えていく体制を作っていく必要がある。そのために、本事業で新たに繋がりのできた各種機関との連携強化を図っていきたい。また、脳卒中障害者と家族にとって外出のきっかけや他者交流の機会に繋がる企画を今後も実施していきたい。